

風土の人間存在論と決定論の問題

——和辻哲郎の環境論とヴィダル・ドウ・ラ・ブラーシュの地理学——

増田敬祐

はじめに

かつて環境と人間の関係を論じることがタブー視される時代があった。なぜなら、この関係の議論は、後述するように自然科学の成果と文化の問題が複雑に絡み合った環境決定論や地理的決定論など、決定論という難問を伴っているからである。^①本論では、和辻哲郎の風土論を参照し、決定論の問題を明らかにしながら、人間にとって環境とは何か、という問いを環境と存在の問題として検討する。まず第一節で、和辻風土論に対する批判を紹介し、第二節で、和辻風土論の整理から決定論の問題を考察する。第三節、第四節では、和辻が評価するヴィダル・ドウ・ラ・ブラーシュの人文地理学の議論を近代地理学の概観とともに確認し、第五節では、ヴィダルと和辻の環境の捉え方について比較検討を行い、和辻の「人間存在の構造契機」について論じる。最後に、和辻の風土論は現代社会の環境の問題を考えるうえで、先見的な環境論

となつていることを示す。

一 和辻風土論に対する二つの批判

一つに、自然科学からの批判がある。栽培植物学の中尾佐助は生態気候区分から和辻の風土の類型はおかしいという。^②生態学者の梅棹忠夫も、風土における主観性の問題を批判し、「風土」では科学的アプローチがとれないため、「環境」という言葉を用いると述べる。^③これらの批判は、二つに、地理学者のオギユスタン・ベルクの風土論とも関わる。ベルクは現在まで和辻風土論を批判的に継承し、深化させているが、一九八〇年代にあつては環境と人間の関係から文化を論じる風土論を「性懲りのない決定論」として批判した。^④その特徴は「文化を自然で説明しようとし」、また「客観的因果関係を主観的アナロジーに逸脱させ、自然科学と文化科学の境界をあつさり踏み越えてしまう」ところにあるという。^⑤和辻の風土論についても「因果論的推論」がみられ、「かなり底の

浅い決定論」に陥っているとするとする。⁽⁶⁾このように「アナロジーと因果関係の混同」された決定論は、「異なる文化に属する人間相互間の、共感さらには交流の可能性を一切排除する文化主義に陥る危険」があるという。⁽⁷⁾しかし、和辻の風土論のねらいは、決定論や日本文化論を論じることにあつたのだろうか。

二 和辻風土論と決定論の問題

和辻は『風土』でヘルダーの「精神風土学」を紹介し、⁽⁸⁾風土の影響は、生理学的構造だけでなく精神的構造においても「二層説き難い問題」であると述べていることに着目する。ヘルダーは「暑さが人体をだらけさせ、寒さがそれをひきしめるということは、我々の知れわたつた経験ではあるが、しかしそこから種々の生理学的現象を説明し、ひいては民族の特性やその精神的活動の特性を結論するというごときことは、到底許されない」という。⁽⁹⁾和辻は未だ自然科学的には克服され得ない人体と風土の「因果関係の混沌」について、「簡単な物理学の実験における因果関係のごとく単純に取り扱う」のではなく、「因果関係の混沌」を「生きた自然の解釈」として具体的な生の姿で捉え、そこから「構造契機としての風土の意義」を理解しようとするヘルダーを評価している。しかし、この「生きた自然の解釈」によって環境と人間の関係を捉える方法こそが、結果的に自然科学からの批判を招き、⁽¹⁰⁾また、人文社会科学からも「客観的因果関係を主観的アナロジー」によって直感のメタファとして解釈する決定論として批判される要因となつた。⁽¹¹⁾

以上、和辻の風土論は決定論として批判的に扱われることが多いが、みてきたように和辻の風土論の理論的枠組みは、自然科学的な手法に基づく「因果関係」のみで自然と人間の関係を決定することには慎重である。むしろ、「生きた自然の解釈」という動態的な自然と人間の関係を重視する立場から、安直な環境決定論を批判的にみている。和辻は「人間存在の構造契機」を説明する方法として「生きた自然の解釈」に基づく風土の議論を展開したが、環境決定論や地理的決定論がタブー視されるなかで、和辻のねらいである複雑に絡み合った決定論の問題を環境と存在の問題として論究する仕方は「主観的アナロジー」と捉えられ、決定論の議論に埋もれてしまったといえる。⁽¹²⁾次に和辻が「人間の地理学」として取り上げるヴィダルの議論をみていく。

三 近代地理学とタブー

ヴィダルの人文地理学について和辻は、自身の風土論との親和性を「人間存在の風土的構造を捉えるという仕事に最も近づいている」と述べ、「人間の地理学」と呼んでいる。⁽¹³⁾ヴィダルの「人間と環境との連関」を精確に捉えようとする試みは、「土地を把握しようとするばそこに積み重なった人間の営為を見いだすであろうし、人間を把握しようとするばそこに烙きつけられた土地の性格を見いだすであろう」ために、「⁽¹⁴⁾連関」は地理的決定論だけで解決できる関係にはないと和辻はいう。「人間の地理学」として評価されるヴィダルの議論は、近代地理学のどのような背景から生まれてきたのだろうか、まず概観する。

近代地理学は、生物地理学、植物地理学などを含む博物学の泰斗、フンボルトと「ヨーロッパの大学における地理学の『最初の専門家』といわれる」リッターによって確立された⁽¹⁵⁾。しかし、十九世紀初頭に発展を示した地理学は、その後、低迷に陥る⁽¹⁶⁾。フンボルトにあつては、地理学は博物学のなかの一部であり、地理学そのものの方法論を構想したわけではなかったこと、またリッターにあつては「地表を神の啓示の場とみなし、地上で展開する自然と人間との関係、その調和のなかに神の意思の貫徹をみる」という宗教的な目的論が、門下生たちリッター学派のなかで「目的論的歴史観と結びついた俗流的な自然決定論」となつていったからである⁽¹⁷⁾。そこで展開される議論は「科学的認識とはほど遠い一般的推論や証明できない主張であつた」⁽¹⁸⁾。

リッター学派に対する批判から、地理学は自然と人間の関係それ自体ではなく、自然科学的な手法に重きをおく地形学、自然地理学、地誌学を中心として展開していった。状況が変化するのは一九世紀の終わり、「人文地理学」という言葉が登場してからである。「人文地理学」は、地理学者のラッツェルがはじめて用いた言葉といわれ、ラッツェルは、『人類地理学 (Anthropogeographie)』のなかで自然環境が人間社会に及ぼす影響を論じ、「人間と環境との連関」について研究することを、失われつつあつた自然地理と人文地理を架橋する「地理学の統一性」の回復であると位置づけた⁽²⁰⁾。

ラッツェルの議論は、当時、様々な学問分野に影響を与えていたダーウインの進化論と連動している。森滝健一郎の整理によれ

ば、『人類地理学』においてラッツェルは「人類が『素材的、物理的かつ進化的に地球に属している』とみる立場から、人類地理学を『生物地理学の一部門』とし、『人類の分布を考察するときも』『連の生物学諸概念をそのまま適用』すべきことを主張した」という。後年の代表的著作『政治地理学 (Politische Geographie)』では「国家を『土地に固着した有機体』と捉え、『生物学的存在としての人類が地表で展開する運動の法則』は、『一定の自然環境のもとではつねに同一の道をたどるもの』であり、人類の歴史は『植物や動物の歴史と全く同様』のものともなされた⁽²¹⁾。また『生存空間……一つの生物地理学的研究 (Der Lebensraum: Eine Biogeographische Studie)』では『生活体』としての国家という概念や『生存空間』という考えを提示した⁽²²⁾。

このようなラッツェルの言説は、環境決定論として批判される側面を否定なく含んでおり、ラッツェルは「自らを環境決定論者と認めていたわけではない」⁽²³⁾が、結果的にチエーレンの「地政学」や「社会ダーウィニズム」による国家有機体説として帝国主義の植民地政策を推進し、また、ナチス・ドイツなどで優生政策の根拠に利用されていく。皮肉にも自然科学的な手法に基づく近代地理学の成果が文化の問題と複雑に絡み合い、人間生活を決定論的に価値づけることになつたのである。ここに見出せるのは、地理学だけの問題ではなく、現代にまで至る人間と科学技術の関係であり、自然科学の成果が環境と人間の関係を文化的に価値づけ、決定する論拠として取り扱われることの危険性である。

決定論に基づく議論は、二つの世界大戦を経た後、反省的に批

判された。「社会ダーウィニズム」を前提とした「生存競争」の原理を肯定し、「適者生存」の名の下に近代国民国家の間に凄惨な総力戦を招いたからである。連関して、人種や文化などに対する差別の温床としても決定論は批判された。このような歴史的経緯から、環境と人間の関係を論じることが、自然科学と文化の問題が複雑に絡み合った決定論としてタブー視されたのである。

四 ヴィダルの人文地理学

ヴィダルは近代地理学の問題点を踏まえ、本論で整理するところの以下、三つの論点に応じた人文地理学の展開を目指したと解せられる。一つ目、「科学的認識とはほど遠い一般的推論や証明」の問題を克服すること。二つ目、単に自然科学として環境と人間を記述するのではなく、「人間と環境との連関」に着目すること。三つ目、環境と人間の関係を単純化された決定論とは異なる方法で論じること。これらについて、ヴィダルの没後に編纂された『人文地理学原理 (*Principes de Géographie Humaine*)』からみていく。

一つ目について、ヴィダルはラッツェルの名を出しながら、「人文地理学の諸事象」は「自然的諸条件の結合が、地球の各部分において、作り出しているところの環境と関係」があるという。この環境 (*milieu*) は、フンボルトなどの植物地理学の研究を受け、また、生態学の創始者ヘッケルに従えば、「唯一にして同一な場所に生活するあらゆる有機体の相互関係、彼らを取りかこんでいる環境にたいする彼らの適応現象を研究する科学」によって明らかにされるものであるという。二つ目について、ヴィダルは環境の研

究から「明確に一つの本質的に地理学的な概念が引き出されてくる」ことを述べ、これは人文地理学における環境とは何かを説明し、「人間と環境との連関」に着目する方法に関わる。「すなわち、異質的な諸生物を共棲と相互的関連の状態に集結しこれを総括的に維持してゆけるだけの力をそなえた複合的環境 (*milieu composite*)」の議論である。⁽²⁶⁾

三つ目だが、ヴィダルは「人類聚落」の議論において単純化された決定論を排し、「複合的環境」を「聚落」の協働から論じる。「環境を改修するとかの目的で協同することの必要は、共同的居住をますます緊密にする」ため、村落は「明白に限定された判然たる一つの有機体であり、自己本来の生命をもち、景観の中に表現されるところの一つの個性をもつたもの」として把握される。⁽²⁷⁾ここに前出の和辻が評価した「人間と環境との連関」を捉える試み、ヴィダルの「人間の地理学」のエッセンスをみることができ。ヴィダルは、人間は「諸事物と生物とを結びつける緊密な連帯性」、この「連帯性の鎖の一部をなすものであり、環境をなしているものとの関係においては、能動的であると同時に受動的」であるとする。⁽²⁸⁾

環境と人間の関係を「能動的であると同時に受動的」とみるヴィダルの議論は、後にフエーヴルによって「ラッツェル流の『決定論者』」に対し、「ヴィダル流の『可能論者』」と名付けられる。人間の活動は「多様で複雑な可能性」を提供してくれる環境のなかから、それぞれの「生活様式」に合ったものを能動的に選ぶ行為の集合であり、環境との関係から立ち現れてくる「生活様式」の

違いが「慣性」(習慣)としての個性をもつ⁽³⁰⁾。この環境と人間の関係は、「人間の行為」の「結合関係」として「景觀に深刻な改訂を加える」⁽³¹⁾。つまり、環境に存在する「人間の行為」は「結合関係」という集団形成＝共同の「慣性」(習慣)の裡に景觀を形作るものである。ゆえにヴィダルは「人間と環境との連関」について、「居住の共同 (cohabitation)」という事実⁽³²⁾から「特定の空間の共用は全ての基礎」であると述べ、「人間の集団はそれが適応している地域的な枠のなかで、他の生物とともに、すなわち同じく集団をなし相互的な関係の下に生活しているところの動植物とともにいる」⁽³³⁾という。

以上、本論の整理したヴィダルの人文地理学の三つの論点には、和辻が評価した「人間の地理学」として、また風土論として、親和性があることを確認できる。しかし、両者の議論には、環境と人間の関係を検討するうえで、その土台において重要な違いがある。

五 ヴィダルと和辻、環境論の比較

環境と人間の関係を研究するうえで土台となるのは、人間にとって環境とは何か、という問いである。この問いについてヴィダルと和辻では、その捉え方に大きな違いがある。ヴィダルの議論における環境とは、自然環境のことである⁽³⁴⁾。これはみてきたように初期の近代地理学が「科学的認識とはほど遠い一般的推論や証明」に陥っているという批判に応じるため、類推や直感ではなく、自然科学的な手法(生物地理学など)から客観的に自然環境と人間

の関係を検討する方法上の便宜であるといえる。しかし、本論ではそれだけでなく環境と人間の関係について、より根本的には自然観、世界観という価値観の部分でヴィダルと和辻には環境の捉え方に相違があると考える。

ヴィダルの人文地理学に通底しているのは、当時の時代状況を反映した近代の発展進歩史観である⁽³⁵⁾。「人間と環境との連関」も人間社会が発展進歩するに従い、自然環境に及ぼす影響を増大させ、また、同時に人間は環境から解放されていく。「ヴィダル流の『可能論者』」であれば、人間はどこまで自然環境をより良い人間生活のために改変できる可能性をもつか、その実証を課題とするだろう。実際、ヴィダルの人文地理学は、地誌的モノグラフや地域地理学として展開していったが、客体として自然環境を捉える関係の議論では、環境は人間にとつてあくまで「個別具体」的な「生活様式」を営むために与えられた対象の自然でしかなく、結局、環境と人間の関係がどのような構造にあるのか、「複合的環境」における自然と人間、人間と人間の関係の構造の研究としては深まらなかった。和辻はこのことについて、「地理学が目ざしているのは人類の生活が繰りひろげられている環境であつて、人類自身」ではなく、ゆえに「土地であつて社会ではない」という。そのため「人間存在の風土的構造」を論究するために「なお一步推し進めるべき点」とは、「環境とか土地の個性」は「あくまでも人間存在に属するということ、従つて環境は人類の諸集団に対立するものではなくして、集団の存在的中身」にほかならず、それは環境を「人間存在の空間性」として把握するということである⁽³⁶⁾。

次に和辻の環境概念をみていく。ヴィダルに対し、和辻は『風土』の序言において「人間存在の構造契機としての風土性」を明らかにするには、「主体的な人間存在の表現」である「風土的形象」を成す環境が問題とされなければならない、それは対象化された自然環境のことではないという^{③④}。このような環境概念は、近代の主客二元論によらずに環境に存する人間を把握する方法として、発展進歩史観を自明とする「普遍」的な人間学とは異なる。和辻の試みは、人間をそれぞれが居合わせる「個別具体」的な環境の存在として論じている点で、近代の「普遍」的な人間観を批判的に検討する「人間学的考察」となっている。従って、和辻風土論は「主観的アナロジー」を展開したのではなく、「個別具体」的な環境の動態に存する人間の在り方を「人間存在の構造契機」として風土から論究したものと解せられる。

和辻の論じる環境は、前述した人間にとって環境とは何か、という自然観に関わる問いを含むものである。人間にとつての環境を客体ではなく、「集団の存在的中身」と捉える発想自体、環境を自然環境として自明視するヴィダルからは見出せない。また、直接にヴィダルを批判しているわけではないが、発展進歩史観について和辻は近代批判として、「欧州人を「選民」とする世界史を是認することはできない」と述べる^⑤。これはヴィダルの「歴史理論」に対する入江敏夫の批判につながるものである。入江は、ヴィダルやその後継たちが、「全世界にわたる詳細な地誌研究にもかかわらず」「ヨーロッパの先進性の形成とアジア・アフリカ・ラテンアメリカの（低開発）の形成との関連」をみようとしていないこと

を指摘する^⑥。ヴィダルの発展進歩史観が前提する世界観では、自然を客体として解剖できる文明こそが自然科学の発展進歩を可能にする優れた文明であり、未だ環境を客観的に捉えられない文明は自然科学が発展進歩できない文明＝停滞した文明と価値づけられてしまう^⑦。

「ヴィダル流の『可能論者』」では、環境問題とは自然環境問題を意味するだけだが、現代社会にある環境の問題は自然環境問題のみで完結するものではない。むしろ、自然環境だけを環境の問題とすることで、環境に生きる人間の問題は、前出の入江の批判にあるようにみえにくくなっている。そこで改めて環境の問題を論じるために、環境を客体ではなく、「主体的な人間存在の表現」である「風土的形象」として捉える和辻の議論をみていく。

おわりに——和辻と環境倫理学

和辻は、環境と人間の関係について主客二元論に依拠した議論とは一線を画し、環境に存する人間の在り方を「存在の現れとしての環境」にみている^⑧。「われわれは環境と人類の集団との間の連関を考察するのではなくして、いわゆる環境において人類の集団そのものの姿を見るのである」^⑨。人間が生存し、存在する活動は、集団性＝人間の共同のなかに環境を縁取り、それが風土として現れる。人間が存在することが環境を生成するということであり、人間が存しなければ環境も存在しない。ゆえに環境の問題は、人間が存在することの問題とならざるを得ない。

人間が環境に存在することの問題は、環境に存する人間の在り

方を規範づける倫理の醸成を必要とする。換言すれば、自然と人間、人間と人間の関係の在り方を問題とし、環境に居合わせる人間存在の倫理としての環境倫理をどのように涵養していくかが問われる。この場合、環境倫理は自然環境問題だけでなく、環境と人間の関係を人間存在の次元から倫理的に究明する意味において、〈存在論的環境の倫理学〉と呼べる環境倫理学となる。存在論として環境を考える〈存在論的環境の倫理学〉では、価値理念化した近代の人間観による倫理ではなく、環境の動態に存在するための人間が醸成する倫理が論点となる。それは例えば、現代日本で深刻化している孤立無縁社会の問題を環境の問題として捉えることにもつながる。

和辻の環境論によれば、環境との関係が希薄になるということは、人間と人間の関係も希薄化するということである。和辻の風土論の現代的意義は、環境の問題を人間の共同の問題として論じ、それは近代社会を生きる人間と人間の関係が孤立無縁化することを、環境の問題の根源に位置づけ、一方で、その打開策を「人間存在の風土的構造」として風土論のなかで人間存在の次元から環境と人間の関係を論究する方法によって示したことの先見である。ヴァイダルと異なり、和辻は環境を風土の人間存在論として論じた。自然と人間、人間と人間の関係の回復が求められる時代に、これまであまり論じられることのなかった和辻の環境論に着眼することは、環境に存する人間の在り方を究明するうえで環境倫理学に新たな方法を提供する。

- (1) 木岡伸夫「地理的決定論再考」『関西大学文学論集 五七(二)』関西大学、二〇〇七、一四頁。
- (2) 上山春平編『照葉樹林文化』中央公論新社、一九六九、四四―六二頁。
- (3) 梅植忠夫・吉良竜夫「生態学入門」講談社、一九七六、五一―六頁。
- (4) ベルク風土論の深化についてはオギユスタン・ベルク『風土学はなぜ何のために』(二〇一四)木岡伸夫訳、関西大学出版部、二〇一九、を参照のこと。ベルク『風土の日本』(一九八六)篠田勝英訳、筑摩書房、一九九二、一六三―一六四頁。
- (5) ベルク、前掲書、一六三頁。
- (6) ベルク、前掲書、六〇頁。
- (7) ベルク、前掲書、一六六―一六七頁。
- (8) 坂部恵「和辻哲郎とヘルダー」『比較思想研究 二七号』比較思想学会、二〇〇〇。
- (9) 和辻哲郎『風土』岩波書店、一九七九、二五六頁。
- (10) 上山春平編、前掲書、四四―四八頁。
- (11) 戸坂潤「和辻博士・風土・日本」『日本の哲学という魔』書肆心水、二〇〇七。
- (12) 和辻、前掲書、二八七―二八八頁。
- (13) 和辻哲郎『倫理学(三)』岩波書店、二〇〇七、三〇五頁。
- (14) 和辻、前掲書、三〇四―三〇五頁。
- (15) 森滝健一郎「地理学における環境論」『水資源・環境研究(1)』水資源・環境学会、一九八七、三五―三七頁。
- (16) 中村和郎・高橋伸夫編『地理学への招待』古今書院、一九八八、一七五頁。
- (17) 森滝、前掲書、三五・三七頁。
- (18) 中村他編、前掲書、一七五頁。
- (19) 杉浦章介・松原彰子・武山正直・高木勇夫『人文地理学』慶應義塾大学出版会、二〇〇五、三三頁。
- (20) 杉浦他、前掲書、三四―三五頁。
- (21) 森滝、前掲書、三七頁。

- (22) 杉浦他、前掲書、三四頁。
- (23) 杉浦他、前掲書、三五頁。
- (24) ジョン・モリッシー／デヴィッド・ナリー／ウルフ・ストロマイヤー／イヴォンヌ・ウィーラン編『近現代の空間を読み解く』(二〇一四)上杉和央監訳、古今書院、二〇一七。
- (25) ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラシユ『人文地理学原理 上巻』(一九二二)飯塚浩二訳、岩波書店、一九四〇、四五―四七頁。
- (26) ヴィダル、前掲書、四七頁。
- (27) ヴィダル『人文地理学原理 下巻』(一九二二)飯塚浩二訳、岩波書店、一九四〇、七一頁。
- (28) ヴィダル『人文地理学原理 上巻』二〇二頁。
- (29) フェーヴル『大地と人類の進化 上巻』(一九二二)飯塚浩二訳、岩波書店、一九七一、五七頁。
- (30) 杉浦他、前掲書、三六―三八頁。
- (31) ヴィダル『人文地理学原理 下巻』八八頁。
- (32) ヴィダル『人文地理学原理 上巻』二〇三頁。
- (33) 杉浦他、前掲書、三九頁。
- (34) 例えば『人文地理学原理 下巻』第2篇の第6章「文明の進化」を参照のこと。
- (35) ヴィダル『人文地理学原理 上巻』二二二―二三頁。
- (36) 杉浦他、前掲書、三八頁。
- (37) 中村他編、前掲書、一八〇頁。
- (38) 和辻『倫理学(三)』二二〇―二二二頁。
- (39) 和辻『風土』三頁。
- (40) 和辻、前掲書、二七八頁。
- (41) 森滝、前掲書、四三頁。
- (42) ヴィダル『人文地理学原理 上巻』九六―一〇一頁。
- (43) 増田敬祐「風土論の変遷と環境の時代」『風土的環境倫理と現代社会』亀山純生監修・増田敬祐編集、農林統計出版、二〇二〇。
- (44) 和辻『倫理学(三)』三二八頁。